

チェルノブイリ通信

<http://www.cher9.org/>

NPO 法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東 2-5-11-5F
TEL/FAX: 092-260-3989
E-mail: jimu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク (CMN) は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、
現地から求められる医療支援を行います。
この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心のつながりを深めます。

No.

111

特集 リュドミラ・ウクラインカ全国講演会

CONTENTS 日本衛生学会市民講座報告① チェルノブイリ汚染地で暮らす「サマ
ショーロ」の現在 / コラム ベラルーシの一日 / 理事・事務局・監
事ご挨拶 / チェルノブイリ報告会のお知らせ / 秋のベラルーシ訪問
予定 / 支援者のお名前とメッセージ



リュドミラ・ウクラインカさん（前列中央）と、チャリティーコンサートに出演した久保山菜摘さん、合唱団の子どもたち

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

郵便振替口座 01770-1-65328
他の金融機関からは 一七九支店（当）65328
楽天銀行 ジャズ支店（支店番号 201）（普）7017104
住信 SBI ネット銀行 法人第一支店（支店番号 106）（普）1030416
※口座名はいずれも「NPO 法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

●特集● リュドミラ・ウクラインカ全国講演会

繰り返してはならないチェルノブイリの悲劇

心の傷を乗り越え、希望と共に生きる

5月13日〜19日、福島・東京・広島・福岡で開催したリュドミラ・ウクラインカ講演会・チャリティーコンサート。全会場でおよそ500名の方々が、その話に耳を傾けました。福島・福岡会場での講演内容をまとめたものを紹介します。

はじめに

私は心理学を20年間学び、現在は大学で心理学を教えています。教員としての経歴は16年で、私の研究テーマはトラウマを受けた人の心理と、トラウマを受けた後の人生にどう適応するかについてです。アンナという13歳の娘と、19歳のネコがいます。

ベラルーシという国は、ヨーロッパの中では小さな国です。山も海もなく、ただ森がたくさんあります。私が住んでいるのは真ん中のミン



ミンスクの大学で授業を行うリュドミラ・ウクラインカ

ク州で、モギリョフ州に祖父母と親戚がいます。ベラルーシの国境は、時にはリトアニアやポーランド、ロシアになったりと、何百年、何千年の間移動を繰り返してきました。ベラルーシにはさまざまな民族がいて、ヨーロッパの国境は無いに等しいようなものです。各国は隣り合い、災害が起きた時にはその被害に巻き込まれるという事情があります。

**チェルノブイリ原発事故
が起きた時のこと**

チェルノブイリ原発事故が起きた



(右・上) 福島会場での講演会より
(下) 広島でのチャリティーコンサート

1986年、ベラルーシは旧ソ連の共和国の1つでした。私は当時10歳でした。

ベラルーシでは冬が半年続き、雪がたたくさん降ります。長い冬の間、子どもたちは外に遊びに出かけることができず、4月になって温かくなると外でばかり遊びます。そんな素晴らしい、明るい温かなある日に、恐ろしいチェルノブイリ原発事故が起きました。

事故が起きた当時、マスコミでは何の報道もありませんでした。事故が起きた4月26日の5日後の、5月1日はメーデーで、政府は国民に積極的に参加するように呼び掛けていたためでした。ただ、いろんな噂がささやかれ、人々は口々にその話をしていました。ドイツの学者が、空气中に非常に高い放射能が検出されたことを伝え、事故について知りませんでした。ヨーロッパから情報が来たら初めて、モスクワの政府も事故を認め公表しましたが、政府や専門家から私たちには、どうやって体を守ればいいのかの指示はなく、私の家族も普通の生活を続けていました。

事故処理に当たった父

4月末に、軍が来て父を連れて行きました。父は当時40歳ぐらいい、軍人ではありませんでしたが、若い頃に徴兵されていた時に化学部隊に所属していたため、チェルノブイリ事故の撤去作業要員として急ぎよ招集されたのです。2週間後、父は家を出て行った時と同じ服装で、つまり放射能に汚染されたままの姿で帰ってきました。帰ってきた父を、パパ、お帰りなさいと私は抱きしめました。その時父がどのくらい放射能を浴びていたのか、私がどのくらい放射能に触れたのかはまったく分かりません。

その後、ペレストロイカ(※)が起きてソ連が崩壊し、チェルノブイリのあるウクライナとベラルーシは別々の国になりました。事故処理作業班のデータはウクライナにあり、

ベラルーシでは分かりませんでした。父は事故処理作業従事者「リグビダートル」ですが、二週間事故処理に従事したという正確な記録や証拠がないため、その後の国家補償などは申請できませんでした。

2005年、父は肺疾患で帰らぬ人となりました。除去作業に携わった人で肺をわずらって亡くなる人は多く、化学部隊で仕事をしていたことにも関連していると思います。同じ年に私の子どもが生まれ、父は孫の顔を見てから亡くなりました。

祖父母の家での被ばく

ベラルーシでは子どもが7歳になると、母親か父親の実家の村で、おじいちゃんやおばあちゃんひとひと夏を過ごします。私もそうでした。

ベラルーシは農業国です。事故により、国の中でも一番温かく、一番農業の盛んな地域が汚染されました。どこまで大丈夫なのかの線引きについては、未だに議論されています。一番早く決まったのは、どの村を集団移転させるかということでした。当時、私たちが一番心配していた

長い冬の後の明るい春の日、 恐ろしい事故が起きました



(上) 旧ソ連の徴兵制度で軍の化学部隊にいた頃のリュドミラの父 (下) リュドミラと父 (1984年)



※注・・・1980年代から進められた旧ソ連の政治改革

なぜ私なのか

あとどれだけ生きられるのか。

さまざまな疑問が浮かびました

のが、祖父母やいとこが住んでいた村が、強制退去になるのではないかとのことでした。ベラルーシのいくつかの村落は、実際に強制退去になっていました。

しかし、そうはなりません。モギリヨフにある私の祖父母の村について、政府はセシウムやストロンチウムが高いことを認めていましたが、移転は認めませんでした。政府が村に伝えたのは、ただ、森の中の木の実やきのこを取ってはいけないということでした。

その後も私たちは、休みになると祖母の村で過ごしました。叔母は、二人の子どもを連れ、自主的にミンスクへ避難してきました。ベラルーシではじゃがいもが主食で、汚染されても自家消費用に育て続けました。すべての家には家畜がいて、私も祖母の家で飼っていた牛の牛乳

を飲み、祖母が畑で育てた作物を食べていました。

甲状腺がん手術

その年の夏が終わり、1991年、病院に行きました。国からの指示は

ありませんでしたが、危険かもしれない地域に住んでいたことを心配した母が、いとこと私を検査に連れて行ったのです。その結果、私だけに甲状腺のしこりが見つかりました。

事故が起きるまで、甲状腺や汚染という問題の経験がなかったため、首都ミンスクの特定の病院でしか検査することができませんでした。すぐにチロキシンという薬を処方されました。数カ月間飲むように指示を受けました。当時日本からすでに良いエコー診断装置が届いていたので、それでいろいろ調べてもらいました。私は、穿刺吸引(※)による甲状腺



(上) リュドミラとお母さん
(下) モギリヨフの村で祖父母やいとこたち、家畜の牛と (いずれも1991年)



検査を最初に受けた一人です。

1992年2月に、手術を受けました。私はその時15歳で、とても怖かったのを覚えています。15歳はそれほど子どもではなく、死やがんについて理解ができたからでした。なぜ他の人ではなく私なのか、どういう副作用があるのか、どれだけ生きられるのか。さまざまな理解できない疑問が浮かび、暗鬱とした気持ちでした。

疑問を抱えていたのは私だけではなく、医者も同じでした。当時の医者も甲状腺の手術についてよく分かっ

ていなかったため、私の場合、甲状腺と副甲状腺も切除しました。手術

後から毎日、今に至るまでチロキシンをずっと飲み続けています。また、手術から数か月たち、骨粗しょう症にもかかっていることが分かりました。副甲状腺も取ってしまったことが原因で、そのためカルシウムも摂り続けています。

小児甲状腺がんと放射性

ヨウ素

子どもが甲状腺の手術を受けるのは非常に珍しく、医者たちも当初は

※注・・・甲状腺の細胞を取り出してがんかどうかを診断する診断法



(上) 福島会場での講演会后、共同通信より単独インタビュー取材を受けるウクラインカ (下) 東京会場でのチャリティーコンサート・報告会の様子

その原因が分かりませんでした。その頃、がんが見つかった子どもは私一人ではありませんでした。十何人見つかり、その後何十人、何百人、何千人になりました。長い年月が経つてから、チェルノブイリ事故で放射性ヨウ素が飛散し、子どもの甲状腺が一気にそれを吸収したことが原因であることが分かりました。

放射性ヨウ素の半減期は8日間です。事故直後の放射性ヨウ素の汚染を測定することはできないため、病気になる人たちのデータ等を見て、このくらい飛んだのだろうと予想した汚染地図がありますが、海や山が無く、平野のベラルーシでの汚

染は広範囲でした。

ヨウ素は成長に欠かせないものですが、事故前のベラルーシでは、ヨウ素が不足していました。子どもたちは、食べ物からヨウ素を摂取できていなかったため、事故後に放出された放射性ヨウ素を一気に吸収してしまつたのです。

もし事故が起きた時に、実態を隠さずに自治体子どもを集めて、安全なヨウ素の錠剤(ヨード剤)を渡していれば、大きな病気は発生しませんでした。

日本には原発がたくさんあり、いつ事故が起きるか分かりません。事故が起きてしまった時に備え、自治

体が安全なヨード剤を準備しておかなければ、ベラルーシと同じことが起きかねません。ヨード剤は高いものではありません。使わないかもしれないし、賞味期限を過ぎて捨てることになるかもしれない。でも、もしもの時の備えとして持っていないければならないと思います。

あと5年の余命宣告と手術の大きな傷あと

私が手術を受けた当時、専門家たちは、子どもの将来に対して、正確な予測を伝えることができませんでした。

ある医師が私に、あと5年か、長くても7年しか生きられないだろうと言ったことを覚えています。

私の頭には、自分の未来はあと5年しかないのだと刻み込まれました

た。同級生たちが皆、自分の進路を考えて勉強を頑張っている時、私が考えていたのは、生と死についてでした。先生から将来何になりたいかを考えるよう言われても、私は何も答えられずつらい気持ちでした。

また、15歳の少女としてつらかったことの1つは、手術の後、首のところに左から右に大きな傷が残ったことでした。その傷をもって生きなければならぬのは、かなりつらいものでした。

手術後、外科医に、この傷を抱えてどう生きればいいのかと泣きながら尋ねると、先生も一緒に泣いていました。医者も答えることができず、私は、自分で答えを見つけるしかないのだと知りました。これ乗り越えて、この苦しみの底から這い上がらなければならぬと思いました。

一緒に泣いてくれた医師。
私は自分で答えを見つけないのだと知りました

あと5年といわれた命、大きな傷あと。 苦しみの中、心理学の道が心の救いに

心の傷を乗り越えて 心理学との出会い

心理学は心の痛みや不安を教える
くれる学問で、私にとつての救い
になりました。大学ではいろいろな授
業があり、死とは何か、死について
どう備えるか、心的外傷後ストレス
障害（PTSD）とは何か、どう向
き合えばいいのかなど、自分にとつ
てとても大事なことを学びました。

PTSD症候群の特徴は、「あと
5年しか生きられない」といった、
短い将来に対する不安です。PTSD
はおかしいことではなく、人間と
しての普通のリアクションなのだ
と分かりました。悪いのは事故が起
きたことであり、自分ではない。私は
PTSDを自分で乗り越えました。

先日、福島で講演をした際に、被
災者と話すことができました。ある
おじいさんが私に、「私の孫が、自
分はあと5年しか生きられないと繰

り返し言う。どうすれば良いか」と
聞きました。私は彼に「それはPT
SDであり、病気ではありません。
普通の反応であり、歪んだ現実が悪
いのです」と伝えると、彼はほつと
したようでした。彼の孫が、当時の
私とまったく同じことを感じたのだ
と知りました。

甲状腺がんの今

あの事故から何年にもわたり、子
どもたちの間に甲状腺がんが増えま
した。首に傷あとのあるベラルーシ
の子どものことを、「ベラルーシの
ネックレス」と呼ぶようになりまし
た。当時の外科医はまず命を救うこ
とが先決で、患者に残る傷あとにつ
いてはまったく配慮がありませんで
したが、今では、手術後の長い人生
を考え、できるだけ傷あとを目立た
なくする努力も行われています。

もう1つ、最近になって分かった

(上) 東京・福岡会場でのチャリティーコンサートで、
ピアノを演奏して下さったピアニスト久保山菜摘さんと
リュドミラ (下) コンサート終了後にロビーで募金
を呼びかける合唱団の子どもたち



明るい知らせがあります。あの時手
術を受けた子どもたちが、現在では

結婚して、元気な子どもを生んで幸
せに生きているということ。私
たちが手術を受けた後、何年生きら
れるか、子どもを生んでいいのか、
何が起きるのか、何も知らされてい
ませんでした。月日が経つうちに子
どもを生む人も出てきて、医者も妊
娠しても大丈夫ということがだんだ
ん分かってきました。

そして、苦い経験があつてこそ伝
えられるのは、このがんは治せると
いうことです。甲状腺がんだけで死
ぬことはほとんどありません。ただ、

早く見つける必要があります。

あの頃の子どもの大人になり、現
在は大人の間でも甲状腺がんが見つ
かっています。私は講義の中で、事
故が起きた1986年に0歳から18
歳だった人は、できるだけ早く検査
を受けてほしいことを伝えていま
す。気づかないうちに自分の中に地
雷を持っているようなもので、甲状
腺を詳しく検査することで、早く異
変に気付くことができるからです。
ベラルーシには、甲状腺がんが見つ
かったらどう治療するか、きちんと
マニュアルがあります。おそらくベ
ラルーシ国民は、甲状腺について世

界中で一番詳しいと思います。

被ばくした事故処理者や被災者の認定

事故の後、政府による原発事故被災証明書が、リクビダートルと言われる直接原発事故処理に当たった人々、および一般住民に対して出さ

れました。医者が書いた私の証明書には、チェルノブイリ原発事故の結果として発症したと書かれています。

ベラルーシの医療事情は、ほとんどの治療が無料で、薬も無料のものがあります。この証明書により、少額の支援金や、一部の有料だった医療・薬代の無償化、公共交通運賃等の一部減免などがありました。

ところが2007年、ベラルーシ政府は予算がかなり過ぎることを理由に、そうした人たちを「チェルノブイリ法」の適用から除外しました。

私たち被災者は、何ともない一般の人に比べれば、病気になったり薬が必要になったりする頻度が高いわけですが、支援金もなく、薬代への補助もなくなり一般住民と同じになりました。それによって一番気の毒だと思ふのは、事故の除去作業に関わったリクビダートルたちです。ウクライナやロシア、カザフスタンでは、今でも政府による被ばく者への支援が行われています。

一番大事なことは生きていくこと。そして一人ではないと知ること。

苦難を乗り越えて

私も娘を生む時、子どもは健康だろうか、病気にならないか、流産しないだろうかとても心配しました。娘は今13歳で、とても健康です。よく勉強し、語学やITを学び、バレエボールやダンスも習っています。

娘は、ハリー・ポッターが大好きで、私は娘に「あなたは知らないと思うけど、本当はママもハリー・ポッターなのよ」と話します。

魔法使いのハリー・ポッターのひたいには傷あとがあり、誰かを助け、苦難を乗り越える特別な力を持っていると思います。私にも傷あとがあり、PTSDを経験し、どう苦難を乗り越えるかを知っているからです。

トラウマを受けた後遺症を経験すると、人間は内面的にも成長します。自分の健康に充分注意をするようになり、毎日毎日を大切に、贈り物をもらっているような気持ちで過ごし

ます。誰にも日々いろんな困難や悩みがありますが、こういう病気を経験した後では、そんな些細なことよりも一番大事なのは生きていくということだと考えるようになります。

私が15歳で手術を受けてから、約30年が経ちました。手術を受ける前までの2倍の時間を生きています。朝、目が覚めると、私は神さまに感謝します。私の人生には明るい未来が開け、日本の人も含めて、たくさんの友達ができました。こうした悲しい出来事がなければ、国際的な支援や友情についても知らずに生きていたと思います。一番大事なことは、知ることです。自分は決して一人ではなく、理解してくれる友達がいる。ほかの国に住む人も支えてくれることは、心の支えになります。私の経験を通し、皆さんに希望を届けることができたいと思います。希望があれば、それに向かって生きることができはるはずだからです。



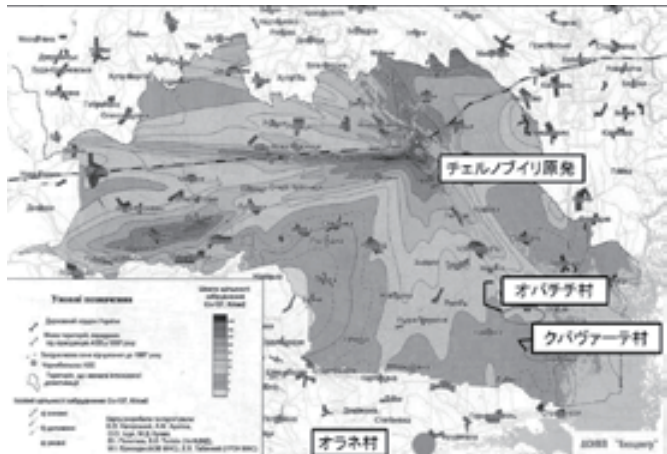
(左) リュドミラと13歳の娘のアンナちゃん (右) チャリティーコンサートに出演した子どもたちと交流するリュドミラ



チェルノブイリ汚染地で暮らす 「サマシヨロ」※の現在

フランチュク・セルゲイさん

(ウクライナ国営企業チェルノブイリゾーン技術
情報サポートセンター)



(上) シンポジウムの様子。奥が木村真三独協医科大学准教授、右がフランチュク・セルゲイさん (下) チェルノブイリ汚染地図。セルゲイさんの住むオパチチ村と、サマシヨロの住むクバヴァーテ村は右下

2018年3月24日(土)、

東京工科大学において第88回日本衛生学会学術総会が開かれ、その一環として、シンポジウム「原発事故被災地からの報告『高齢者の終の住処』」が開催されました。

シンポジウムより、チェルノブイリ原発ゾーン内ガイドとして働くフランチュク・セルゲイさんと、福島県浪江町で町議をされている馬場績さんのお話について、2回にわけて掲載します。

第1回の今回は、セルゲイさんによる、チェルノブイリ汚染地で暮らす人びとの現在についてです。

(文責/河上 雅夫)

※注：「サマシヨロ」とは、放射能汚染のため強制移住となったが、移住先から故郷に自主的に戻った人たちのこと。主に高齢者で、自給自足に近い暮らしをしている。

チェルノブイリガイドの仕事

私は現在、ウクライナ環境省登録チェルノブイリガイドとして働いています。すべてのゾーン内ガイドは、ウクライナ環境省に登録しなければなりません。チェルノブイリゾーンに入りたい人は、事前に所定の手続きを経て入域許可をもらわなければなりません。その過程で登録されているゾーンガイドの中から同行ガイドが選定され、30キロメートル圏まで出入りし、入域者の車両に同乗し、常に入域者と行動を共にし、担当入域者のゾーン内でのすべての行動を管理します。ゾーン内のすべての場所を説明するのは当然ですが、ゾーン内では多くの禁止事項もあり、入域者がそれに違反しないように見張るのも我々の重要な仕事

です。

プリピャチ市やチェルノブイリ発電所など、ゾーン内のさまざまな場所を案内します。ちなみに、昨年2017年一年間で四九、七五八人のゾーン入域者があり、そのうち三四、八三八人が外国人、六八〇人が日本人でした。

移住後に汚染地へ戻るサマシヨロク

福島では帰還政策が始まったと伺いました。しかしながら、私の職場でもあるチェルノブイリゾーンでは、約32年経った現在でも公式には生活が許されておらず、30キロ検問と10キロ検問で、警察による入域管理が行われております。

そんな中、強制移住後に離れた

土地に再び戻る生活を続けておられる方たちがいらつしやいます。彼らを現地ではサマシヨロクと呼びます。

現在は、彼らのゾーン内での居住権は例外的に認定されて生活しています。皆、生まれ育った土地での生活を希望して住んでいますが、行政からのサポートは限定的で必ずしもいいことばかりではありません。むしろ相当の覚悟がないと厳しい生活が待っています。

サマシヨロクが抱える食料と医療問題

特に大きな問題が食糧と医療の問題です。

食糧に関しては、訪問販売の移動車と畑での収穫が彼らの生命線で

す。しかし、畑での収穫は年々ムラがあり、また手作業での野良仕事は高齢者にはかなりの負担になります。

また、訪問販売の業者にとって、大した売り上げにならず利益にもならない上、道も非常に悪いので行くことが困難なことがよくあります。その上、雪が降ると車が通れず、一ヶ月近く訪問販売が来ないこともよくあります。

主食のパンは自給が不可能で購入でしか入手できず、私が彼らのもとを訪れるときはできるだけパンを買って届けるようにしています。日本人の方々にとってのお米と考えていただければ分かりやすいかと思えます。今、もし皆さんの生活から米がすべて消えてしまったと想像したら、大変なのではないで

しょうか。

医療に関しては、病院も診療所も近隣にはなく、一番近くても、数十キロ離れたゾーンの外の町に行かなければなりません。もちろん車もないので救助を呼ぶしかないので、入れるのはゾーン内で働いている森林職員の方々くらいです。携帯電話の電波が通じるので、助けを呼ぶことはできますが、一人暮らしの方々がほとんどで、倒れるとそのま

故郷への強い思いの先にあるのは多くの現実的な困難。



徴兵されていた頃のセルゲイさん



チェルノブイリ原発3号炉を覆う、「新石棺」と呼ばれる覆い。講演スライドより。

まともということも考えられます。薬局もないので汚れた包帯を何度も使用したり、動物用の薬を使用している方もいらつしゃいました。

故郷への強い想いの先には、多くの現実的な困難が待ち受けているというのが、現在のウクライナのサマシヨロの方々状況です。

チェルノブイリ原発事故と私

この地図は（8ページ参照）軍隊の線量測定部隊が作成した汚染地図

です。この赤い部分の汚染が一番ひどいところ。この地図は事故後10年間で作成されました。

この一番下の丸は、私が住んでいる村です。ゾーンに入る車道がある30キロメートル検問から、10キロメートルのところにあります。地図では、検問があつてオパチチ村の上のところ。チェルノブイリ市があります。そしてその上が検問です。現在、サマシヨロの方々住んでいるのは、クパヴァーテ村をはじめ4ヶ所です。

私は若いころ、徴兵によりシベリアのノボシビルスクにある地下のロケット発射基地で兵役につきました。徴兵から帰って結婚し、ゾーン——当時はまだゾーンがなかったのですが——その中のコルホーズで、トラクターやコンバインの運転手として働いていました。1985年、事故から約半年前に娘が生まれ、事故が起きて6日後に洗礼を受けました。

私は、チェルノブイリ原発事故が起きて2〜3時間後に、事故につ

いて知りました。友人が気象観測所で働いていて、彼のところに事故の情報が入って来ました。ただ、事故に関してはあまり情報がなく、実際に知っていたのは消防士と警察の方々だけでした。避難が始まったのは、その2日後の27日のお昼2時だったと思います。その後、5月6日まで避難は続きました。

この写真（上写真）は、建設中の「新石棺」で、耐用年数は約百年と言われています。一昨年に「新石棺」がスライドして4号炉の上に被さり、今年中には、最終的な石棺の作業が終わる予定とされています。世界で一番大きな可動式の建造物で、三万六千トンあります。

人びとの暮らしとサポート

自分の意思で戻ってこられた、クパヴァーテ村に住んでいるマリヤおばあさんに、木村真三先生がなぜこの村に帰って来たのか質問したところ、彼女は「自分は頭が悪かった。帰ってきてはみたが、時間が経

ち歳をとって、誰にも必要とされなくなってしまう。一人で住んで病気になるってしまったらどうしよう。最終的には娘のところに行くことになるのだろう」と言われていました。私は、ウクライナ政府からのサポートが無くなってきた10年ほど前から、彼らに医薬品や食料品を届けてサポートをするようになりました。

事故後の88年、89年くらいから支援を始めましたが、それまでは、車両を行政が手配し、その車で定期的にその方たちを買い物や教会などへ連れていっていました。一週間か二週間に一回、移動検診車が来て、サマシヨロの方々健康診断もおこなっていました。また、行政の支援とは別に、様々な海外の宗教団体や人道支援団体等も、人道支援物資のサポートを行っていました。私たちのようなゾーン内ガイドも、同じように、訪問した際に食料や医薬品を届けています。

クパヴァーテ村のガンナおばあさんには、一冬に3〜4トンの薪が



ガンナおばあさんとソフィアおばあさんお姉妹。
 講演スライドより。

必要です。薪は森林職員の方々がサ
 マシヨロのところに届けてくれま
 す。1本当たり約1〜1.5メート
 ルの長さがあります。

ガンナおばあさんは、転んで手
 をつけた時に手首を痛めてしまった
 そうで、手を怪我して薪割りができ
 ないので何とか薪割りをしてくれと
 私に頼みました。この村に男性が生
 きていた時には、彼らが手伝ってく

れていたのですが、その男性たちも
 亡くなり、ほぼ女性だけの村になっ
 てしまいました。森林職員の方々も
 薪を運んではくれますが、薪を切る
 ことまではやってくれないのです。

サマシヨロの方々から薪を
 切ってほしいというお願いの電話を
 もらうと、私は必ず切ってやるよう
 にしています。この村には男手が無
 く、彼女らだけでは困難なので、私
 のような人間が手伝ってやるほか
 に方法がありません。

私のようなゾーン内ガイドには、
 78名が登録されています。私はそ
 の中でも最古参の人間で、かつ、
 私はゾーン外のすぐ近くに住んで
 いるため、常日頃からさまざま
 サマシヨロへの支援をしています
 す。ほかのゾーン内ガイドのほと
 んどは、遠く離れたところに住ん

でいるので、主に食料を届ける支援
 をしています。

これは(上の写真参照)、ガンナ
 おばあさんと妹のソフィアの姉妹が
 一緒に住んでいるところです。ガン
 ナおばあさんは88歳、ソフィアおば
 あさんも80歳を超えていたはずで
 す。

妹のソフィアおばあさんは障が
 い者で、脳性麻痺のためまったく歩
 けません。ガンナおばあさんから「も
 し私に何かあったらソフィアはどう
 すればいいんだろうか」とよく言わ
 れます。私はお姉さんのガンナおば
 あさんに、もし何かあったときに
 は、ソフィアおばあさんをゾーン外
 の近くの町にある老人ホームに連れ
 て行ってサポートすることを約束し
 ました。私の村のすぐ近くにその老
 人ホームがあるので、そういう時が

訪れたら彼女をサポートするつもり
 です。

障害を抱えたソフィア婆さんと
 足に皮膚病を抱えたガンナ婆さん
 は、「この先どちらかが動けなくなっ
 たら、二人でゾーンの外の老人ホー
 ムに行くことに決めた」と、私に
 語ってくれました。ガンナおばあさ
 んは足に潰瘍があり、だんだんひど
 くなってきました。訪問した際に、
 木村先生から塗り薬等もいただきま
 したが、彼女は、人間の薬がない
 時は動物用の薬も使っていました。

一番大事な彼らへの支援は、や
 はり食糧と医療だと思います。食糧
 に関しても、買うお金はあっても、
 物を持ってきてもらおうか買いに行か
 なければなりません、それ自体が
 困難なのです。

食料や医療、薪の調達や力仕事、福祉ケア。 サマシヨロの高齢化と将来への不安。

32年目のチェルノブイリ

ベラルーシの様子と町の声

2018年4月26日、チェルノブイリ原発事故から32年が経過したベラルーシ。首都ミンスクでも、事故犠牲者を追悼する行事がいくつか開かれました。

午前9時半近く、事故の消防活動に赴いた英雄の名がつく「イグナチェンコ通り」では、チェルノブイリ追悼集会が行われました。厳粛な雰囲気で行われた集会には、主催の緊急事態省職員、若い消防士、当時の防災活動にあたった人たちが参加しました。挨拶の後、イグナチェンコ氏の石板が掛かる壁下に花が添えられ、各隊が規律正しい行進で敬礼をしていききました。こうして英雄の残した勇気は、現在の世代に感慨深く伝えられています。

シ共和国ドラマ劇場で「チェルノブイリの祈り」の演目が披露されました。脚本は、ベラルーシ人初のノーベル文学賞受賞者、スベトラナ・アレクシエービッチさんが執筆した「チェルノブイリの祈り〜未来の物語」に由来。舞台では、各登場人物が悲惨な事故の体験を心の底から震えるような声で語り、観客は真剣な面持ちで見守りました。役者のセリフの中で、何度もチェルノブイリ事故と広島原発とが比較され、『ヒバクシャ』という言葉が使われていたのが印象的でした。取材に訪れた私に、主催者側は特別席を用意してくれ、共通した原発事故の歴史を持つ、両国の絆を強く感じました。

翌27日、「チェルノブイリの祈り」の上演前に、大女優のタチアナ・マルヘリさんと、ミンスク国立青少年観光生態学センター郷土史部門主任のアンナ・サジェニヴァさんにお話を聞くことができました。

舞台で母から受け継いだ歌を披露しながら、主役の一人を演じるタチアナさんは、劇を通して32年前に起きた大惨事を多くの人に伝えていくことが大事だと言います。

「32年前、私はピテフスクで女優として働いていました。私はゴメリの学校に通う少



①



②



④



③



⑥



⑤

(右上から) ①イグナチェンコ通りでの集会 ②石版に掲げられる花輪 ③ドラマ劇場内での講演の様子 ④ベラルーシドラマ劇場 ⑤大女優タチアナ・マルヘリさん ⑥国立青少年観光生態学センターのアンナ・サジェニヴァさん

チホン・マギリンくん

(13歳・男性・陸軍幼年学校生徒)

僕はミンスク出身だけど、チエルノブイリ近郊生まれの母から事故のことはよく聞かされました。被害者や自らを犠牲に防災活動にあたった人たちのことを思うと心が痛みます。全てが一刻も早く解決されることを願います。

ミンスクにある長崎の鐘の前にて



スベトラナー・チジクさん (21歳・女性・国立ラジオ文化放送アナウンサー、学生)

私はまだ生まれてなかった頃のことだけれど、スルツク(ミンスク州)にいた父に事故のことはよく聞いていました。じわじわと人類を滅ぼしていく放射能の影響がいまだに残っていることは、この上なく恐ろしいことです。放射能の問題を克服することをあきらめてはなりません。私たちは生きているのだから。

職場の国立ラジオ局にて



イリヤ・ヴォイストラチエンコさん

(31歳・男性・エネルギー技師)

私は、事故の起きた年の10月にゴメリで生まれました。チエルノブイリの悲劇を伝えるドキュメンタリー映画等を見て、放射能の恐ろしさを強く感じるようになりまし。この悲劇を忘れず繰り返さないよう努力していく必要があります。被害者への救済処置も大きな課題です。

合唱団として歌うニコライ聖堂前にて



オリガ・アリモヴァさん

(41歳・女性・裁縫師)

今年に限って、親族は汚染ゾーン内にある墓地に1日だけ入れる許可が出たと聞きました。ただ32年目という月日は、放射能の消滅を意味するわけではありません。ずっとプレストに住んでいますが、今も家族のためにできるのはゾーンで栽培された食物を購入しないように気をつけることくらいです。

息子のドミトリー君とプレストにて



スベトラナー・クプリャコヴァさん

(65歳・女性・音楽教師)

2人目の子を出産した直後に起きた事故で、当時は子供たちの健康のために、現在住んでいるプレストからさらに遠くへ引っ越してしまいたい気持ちでした。世界が平和であるよう願うのみです。

プレストの自宅にて



イヴァン・サーチエンコさん

(79歳・男性・国際報道専攻科名誉教授)

事故が起きたのは、私が汚染ゾーンの村にある両親の墓を訪れた日でした。匂いも持たない放射能に気づく者は誰もおらず、平和に暮らしていた人々が涙ながらに故郷を捨て、避難を余儀なくされたのを覚えています。原発事故による放射能の恐怖は今も身に染みんでいます。世界のどこであろうともこの悲劇はもう繰り返されてはなりません。

ジャーナリズム学部内にて



田中仁(たなかひとし)ノミンスク大学卒業後、フリーランスのジャーナリスト、通訳として国内外の新聞や雑誌で活躍中。ミンスク在住。

私たちがスタッフです

理事・事務局・監事より

ご挨拶

2018年度総会で役員改選をおこない、新たな役員体制で活動に取り組みます。どうぞよろしくお願いいたします。

チェルノブイリ、そして福島へ

代表理事 平川可南子

チェルノブイリおよび東日本大震災の被災地へのご支援に深く感謝申し上げます。この度、新たに理事長に就任させていただくことになりました、平川可南子です。

て知り、実際にベラルーシへ足を運ぶ中でこのような事故を二度と起こしてはいけないと強く思うようになりました。

そのような中、2011年に東日本大震災が発生し、日本もベラルーシと同じ原発事故の被災地となってしまいました。今後はチェルノブイリ原発事故被災者の方々への息の長い支援を続けていくとともに、福島へベラルーシでの経験をつなげていきたいと考えています。一人でも多くの方へ支援を届けるためこれからも理事をはじめとするスタッフ一同力を尽



くしていきます。活動についてのご意見やご要望、疑問等ございましたら、ぜひお聞かせください。支援者の皆様と一緒に活動を作り上げていく団体でありたいと思っています。

どうぞこれからも変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

副代表理事 和田 幸策

私のスタートはボランティアへ参加したことがきっかけです。検診団の派遣や福島支援を中心にした様々な活動も、皆様のご支援が大きくなりました。これからも原点を見据えながら、新しい発想も取り入れて団体の運営を行っていきたく思います。



理事 河上 雅夫

リュドミラ・ウクラインカさんの来日講演が無事に終了し、今後はリュドミラさんの話を広めていくことが福島支援の柱になると考えています。また、今年度のNGO・外務省定期協議会 連携推進委員に任命されました。私の役目は地方のNGOの声を外務省に届けることです。



理事 小川 峰湖

理事の小川と申します。ご支援いただいている会員の皆様のお力で、息の長い活動を続けていられることを本当にありがたいことと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。



チェルノブイリから32年
福島原発事故から7年

報告会

専門家からみた汚染地域での 医療支援活動

ベラルーシ共和国における甲状腺がん検診と
甲状腺内視鏡手術のあゆみ

入場無料

託児あります

チェルノブイリ原発事故の後、被災地では甲状腺に何が起きているのか。これまでプレスト州での甲状腺がん検診に参加されてきた、臨床検査技師の渡會泰彦さんより、被災地の甲状腺がんの最前線の状況について、わかりやすくお話しします。ベラルーシ紹介、医療支援活動紹介もあり。ぜひご来場下さい。



渡會泰彦さん



- 日時 2018年8月25日(土) 13:00~16:30
 - 場所 九州ビル5階 大会議室 (福岡市博多区博多駅南1-8-13)
 - 報告 渡會泰彦 臨床検査技師 (日本医科大学付属病院 病理部技師長)
田中仁氏 (ベラルーシ国立大学院生、ミンスク在住)
河上雅夫 (チェルノブイリ医療支援ネットワーク理事)
 - 主催 チェルノブイリ医療支援ネットワーク ●共催 グリーンコープ共同体
 - お申込・お問合せ NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク
TEL 092-260-3989 e-mail:jimu@cher9.org
- ※会場準備の都合上、事前に参加申込をお願いいたします。



今年9月9日~23日の期間、医療専門家とベラルーシを訪問します。
今回の目的は、プレスト州での患者さん取材、甲状腺プレパラートについてヒアリング、プレスト州赤十字移動検診チームによる甲状腺がん移動検診取材、検診車や医療機器等支援ニーズ調査などです。帰国後には、報告会も開催予定です。
【訪問予定】木村真三氏(獨協医科大学准教授)、山田英雄氏(ロシア語医療通訳、コーディネーター)、河上雅夫(理事)、川原秀之(理事・事務局)

今秋
ベラルーシを
訪問予定

理事 寺嶋悠

高校の時のボランティアとその後のスタディツアー参加がきっかけで、活動に参加するようになりました。現在は熊本で子育てをしながら活動に参加。母となり改めて放射能の恐ろしさや命の大切さを感じています。通信編集も担当。紙面の感想やご意見もお待ちしております。



理事・事務局長 川原秀之

散歩や風景を眺めるのが大好きな壮年です。ベラルーシ共和国で見た、ゆっくりと時間の流れるのどかで穏やかな風景を忘れません。通信制サポート校の教員をしながら、事務局に携わり10年が過ぎました。これまで活動に関わられた先輩の想いのバトンを、次の世代に渡すつなぎとして頑張ってください。よろしく申し上げます。



監事 三島やよい

事務局退職後、団体の運営を第三者の目でチェックする監事として、再びチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動に参加することになりました。今後ともよろしく申し上げます。



たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計	6,519,557円
*活動支援金	6,460,557円
*のぞみ21カンパ	3,000円
*雪だるま3号カンパ	2,000円
*東日本支援カンパ	33,000円
*おまかせカンパ	21,000円

(2018年2月～5月までのご寄付内訳)

●口座受付寄付

石橋啓子 稲毛修子 榎本みつ枝 沖佐和子 金只律子
黒川和子 貞池和恵 里見照子 澤野重男 渋谷けい子
関根敏子 高木裕子 高橋武三 田中裕一 田中啓 遠山
祥子 鳥巢多加子 中島乃婦子 中村幸枝 日本キリスト
教会 折尾伝道所婦人会 野村文子 深川哲臣 福井寿雄
福山知恵子 本田美穂子 松井岩美 本岡眞利子 森悠子
森戸春江 諸隈啓子 和田政子

【都道府県別】

【東京都】 5名 【静岡県】 1名 【愛知県】 1名
【大阪府】 31名 【兵庫県】 25名 【鳥取県】 27名
【島根県】 51名 【岡山県】 30名 【広島県】 124名
【山口県】 132名 【福岡県】 594名 【佐賀県】 47名
【長崎県】 52名 【大分県】 104名 【熊本県】 247名
【宮崎県】 40名 【鹿児島県】 82名

計1593名(匿名含む)

※振込用紙記入欄に、通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみお名前を掲載させていただきます。

●月々の定額寄付(マンスリーサポーターの皆様)

相羽美香子 儀道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子

井上礼子 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久保仲子
大久保弘子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落
石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河
上雅夫 川崎君子 川崎清美 川尻愛子 木村雅子 倉掛
大輔 古賀輝洋 古賀尚子 後藤子企子 財津耐代子 財
津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 坂口馨子 佐々野也依
佐竹早苗 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子
末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子
珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 富永隆史
鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆ
み 永野沙智子 西首延子 丹羽道代 納富育代 深川哲
臣 福井初子 福本勅子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子
松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山さより 水本敬
子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 村松知子 室屋芳
乃 矢野和代 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄
子 渡邊久美子 渡邊真志子 計118名

●株式会社カタログハウス様より、100万円の運営支援カンパをいただきました。心よりお礼申し上げます。

貴重なご寄付をお寄せいただき、どうもありがとうございます。皆さまよりお預かりしたご寄付は、チェルノブイリ被災者医療支援、福祉工房のぞみ21支援、検診車雪だるま3号購入の積立、東日本震災被災者支援、事務費用等に当てさせていただきます。

皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●少額で申し訳ありませんが、少しでも何かのお役に立てたら幸いです。●チェルノブイリの子供達のために。●通信ありがとうございます。●子供達が元気です。●お世話になります。●福島との関連を、比較を知りたいです。●お世話の原義がなくなること祈っています。

講師派遣

講師 派遣を行っています。お友達やグループ、地域の集まり、学校の授業などでチェルノブイリ勉強会を開催してみませんか？小中学校の総合学習、大学の講義などへも講師派遣実績あり。まずは一度、事務局までお気軽にご相談下さい。

お知らせとお願い

振込 用紙は毎号同封させていただいています(すでに募金をいただいているグリーンコープ会員の方をのぞく)。これは「思い立った時にいつでも振込できるように、毎号同封してほしい」というご要望をいただいたためで、決してお振込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、ご不要な方はご処分のほどお願い致します。

月々 300円から、手軽にチェルノブイリ支援! ゆうちよ銀行で、毎月26日に指定の額の募金を自動引き落とし。マンスリーサポーター募集中です。手続きは簡単。ホームページが事務局まで。**住所** を変更された方、通信が複数部必要な方、今後の送付を希望されない方は、事務局までご連絡下さい。

編集後記

17年ぶりの来日となったリウドミラ・ウクラインカさん。各地の講演会では分かりやすい言葉で自身の経験を伝えてくれました。講演の合間には、宮島や福岡タワー、大宰府天満宮なども訪問。春風の中で、束の間ゆったりとした時間と自然を楽しんでいました。ご協力・来場いただいた皆様に改めて心より御礼申し上げます。(Y・T)

活動の様子や通信バックナンバーなどはホームページをチェック!

チェルノブイリ 医療支援

検索

地球にやさしい再生紙と大豆インクを使用しています